

---

POST

海上なつ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

POST

### 【Nコード】

N7080E

### 【作者名】

海上なつ

### 【あらすじ】

お昼の家での出来事。佑晴はポストに届いたある手紙を読むことで、短い時間に最悪の状況と化す。その差出人とは 自分自身。それは彼の触れてはならない過去を思い出させてしまう。とても悲しい物語。

太陽の光が、カーテンを強く突き抜けている。

正倉 佑晴は、のそりとベッドから起き上がると、無造作にテレビの電源を入れた。それとほぼ同時に見た時計は、すでにお昼の十二時を指していた。

いつもと変わらない煙草のにおい。

今、この家には彼の家族は他に誰もいない。父親の友人から訳あって譲ってもらった旅行券が、人数分より一枚少ないというアクシデントがあつて、彼がその犠牲となったのである。今年から高校三年生になるということで、安心して家族は今朝早くから三泊四日の旅へと胸を躍らせて出かけて行つた。テーブルにあつたメモには「お留守番よろしく」とだけあり、朝食にと、パンのみが用意されていたのがその証拠である。

「今日の自慢のペットを紹介してくれるのはー？」

窮屈なテレビ画面からは、こちらの状況など全く気にしない元気な声が聞こえてきた。続いて大きな犬の姿が映つた。佑晴はパンを齧りながら、テレビのチャンネルを変えた。

風景が変わつて、すぐに数人の笑い声が聞こえる。顔の知っている芸能人はいたものの、大して話の内容に興味はなかった。また違う番号のボタンを押す。

「私、見ちゃったんです」

女性の真剣な顔が映つた。どうやら実際の恐怖体験を話しているらしい。

こういうもんは深夜にやれよな。と、部屋に一人で見ていたものの、佑晴は怖がるどころか微笑を浮かべた。

それから、新聞を取りに行くため、テレビをつけたままドアの鍵を開けて外へ出た。この辺では珍しい、真っ赤なポストを調べに。いつものように、入りきらずに見えていた白黒の紙の束をひっぱ

ると、小さな封筒がすべり落ちたようで、佑晴はそれを拾い上げた。  
「あれ……これ何だ？」

その表面には、こちらの住所も、差出人も、何もかも書かれていなかった。

「誰かが直接ここに入れたってことだよな……」

気味が悪かったが、とりあえず家の中へと入った。

ソファへ落ち着くと、不意にテレビの声だけが耳に届いた。

「あれを開けたのが、悪夢の始まりでした」

ははは。何言ってるんだ。渡そうとした近くの知り合いが、俺を起こさないようにポストに入れたとかだろ。

そう思い、一応窓を開けて外の様子を見てみた。が、人の気配はなかった。昼間の通りは静かなものである。

「あれを開けなければ」

「うるさいな」

「……」

佑晴の声と共に、テレビに移る女性は静かにさせられた。

そしてビリビリと封を破く音が続く。

「俺宛て？ 親？ それとも妹か？」

疑問は開けて中を確認すれば分かることだ。そう思いながら、手を動かした。

そして彼は気づく。予想していた宛名はみんなハズレだったことに。

中から出てきた真っ白な手紙には、下手な字でこうあった。

『しにがみさんへ。』

ぼくのところへきてください。 まさくらゆうせい』

一瞬、時が止まったように動かなかった。金縛りにあったように、静止し続けた。

やがて、佑晴の頭の中をある昔の記憶が支配した。

「あ……ああ！やめろ、やめろおおおオ！」

小学三年生。嫌いなやつがいた。脅かそうと思ったただけだった。父さんのライターを持ち出して、そいつが家にいることを確認すると、ポストから出た紙に、火をつけた。すぐに気付いて消しに来ると思っていた。あるいは、勝手に燃えて終わるのかと思っていた。なのに、その火は落ちて庭の草に燃え移り、広がっていった。幼い僕にはどうすることもできなかった。そのまま家はあつという間に炎が包んだ。そして 目の前にたくさんの泣き顔があつた。僕のせいだとは誰も思わなかった。罪の重さを知った僕は、死にたいと思った。誰にも言えなかった。死ぬ勇気もなかった。独りで悩んだ末、ポストに死神宛てに手紙を出した。信じていた。いつか必ず、僕を殺しに来てくれると。

「ずいぶんおそかったね、まってたんだよ」

悲しく笑う少年がいた。幼い自分自身。彼は今の佑晴に言う。

ずっと存在していた、変わることはない気持ち。

「消える！…思い出したくないんだ、やめてくれ……死にたくない」  
目の前の自分の幻に、必死に訴えた。忘れることでおだやかな日常を手に入れた今の佑晴には、それを認めることはできなかった。

その時、強風が吹いた。さっき開けた窓から入ってきた風を受けて、佑晴の足元は容易くぐらつく。

倒れた体のちょうど頭の位置には、机の硬い角が待ち構えていた。まるで人形のように軽い音が響く。

意識を失う直前に、確かにあの頃の自分の声を聞いた。

「ぼくが、しにがみだったんだね……」

部屋には、真っ赤に染まった床と、かすかに漂う煙草の煙が残った。



（後書き）

読んで下さってありがとうございます。  
海上なつです。

この物語は、「怖い」というより「悲しい」ものになったと思います。

その最大の理由に気づいたでしょうか？

主人公は最初から最後まで、独りなのです。自分以外の家族は出掛けていて、周りに人の気配がない。さらに過去の事さえも、誰にも救いの手を求めず、ずっと独りで抱えていたのです。

そして最後は独りで育てた自分自身に殺される。その後、彼が発見されるのはいつになるのでしょうか？……そう考えると怖いですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7080e/>

---

POST

2010年12月18日02時18分発行